

# 新会長挨拶

## 学会を考える\*

松井 佳彦 Yoshihiko Matsui

令和元年6月18日に開催されました第122回理事会に於きまして、本会の会長に推挙され、謹んで受諾させていただきました。4年前に副会長を仰せつかってから、学会とは何かということをときに考えるようになりました。そもそも、学会とは学術や技術を極めんとしている者、研究者-真理の探究のみならず研究成果の社会還元や実装も期待される水環境の分野では、産官学の研究者や技術者などが共通または関連の課題について、それぞれが獲得した知見を交換し、さらなる発展を図る場であることは間違いないと思います。しかしながら、今日では情報を得る手段は多様になり、さらに容易に得ることも可能になっています。インターネットの検索サイトや、Scopus, Web of Scienceなどの2次文献サイトが充実しており、簡単に国内外の情報を見つけ、アクセスし、入手可能になっています。かつては学術集会としての学会に出かけることが最新の情報収集になっていましたが、いまや情報の提供・収集の場という意味では学会の価値は相対的に下がっていることは否めません。ZoomやSkypeを使えば、電話よりも臨場感、相手の表情も伝わりながら双方向情報交換が可能です。しかし、なんといってもface to faceが優れていることは論を待ちません。新たなネットワーク形成、意図しない偶発的な情報への遭遇、紙面などの奥にある詳細な情報の獲得の機会の提供などは学会に代わるものはないと言えます。

日本水環境学会の大きな特徴は、その年会参加率の高さにあります。毎年、会員（学生会員を含む）の約50%が年会に参加しています。このことから、会員の多くは日本水環境学会を主たる学会活動の場として位置付けていただいているものと考えられます。年会に参加し、講演会やポスター発表を眺めて歩くことは、知らなかった分野からの新しい情報を得る機会も与えてくれます。環境系の学会はまさしく異分野融合・総合型の学会です。その意味でも、年会やシンポジウム、WETなど本会が主催している集会に参加していただき異分野交流による新しい知、課題、分野の創出の機会を獲得していただき



博士（工学）

昭和59年 北海道大学大学院工学研究科  
衛生工学専攻博士後期課程中退  
59年 同大学助手（工学部衛生工学科）  
平成7年 岐阜大学助教授（工学部土木  
工学科）  
10年 同大学教授（工学部土木工学科）  
17年 北海道大学教授（大学院工学  
研究科環境創生工学専攻）

IWA 理事

日本水環境学会学術賞  
文部科学大臣表彰科学技術賞

たいと思っています。魅力ある学会づくりに微力ながら貢献したいと思っております。

もう一つの学会の重要な役割は研究成果をオーソライズし、出版物として公表することです。本会では、和文と英文の論文の公表の場として、水環境学会誌と Journal of Water and Environment Technology を出版しています。英文論文の出版は商業学術雑誌との競争にさらされています。さらに電子ジャーナル化の進展があり、極論としては、Webサイトに論文を発表して、研究者・技術者同士が読み合えばよいとの考えもあるようです。反商業主義運動ではありませんが、ピアレビューを通じた論文の質の保証を担い、投稿された論文や最新の情報をまとまった形で企画論文として滞りなく出版するという基本的なサービスを地道に遂行していくことが学会の使命と考えます。その一方で、本会の学会誌などの価値を外部から評価してもらえるような活動も継続していく必要があります。

日本水環境学会は会員数からみれば中規模の学会ですが、年会などの参加者数からみれば大きな学会といえます。また、本会は学会誌などの出版や年会・シンポジウムの開催以外でも様々な行事を行い、会員にとって魅力ある活動を多数行っております。本会の活動は1962年にロンドンで開催された第1回国際水質汚濁研究会議に端を発しますが、2年後の2021年には、前身である日本水質汚濁研究会が設立してから50年、社団法人化から40年を迎えます。現在、いくつかの記念行事の実施が検討されております。このような伝統のある学会の責任者として身が引き締まる思いではありますが、この50年の節目に学会の意味、意義を再確認しつつ、会員の皆様、学会の運営に日頃、ご尽力いただいている皆様のご意見に耳を傾け、ご支援、ご協力をいただきながら、会員の皆様が期待するサービスを提供できるように責任者として役目を務めさせていただきたいと思っております。よろしくお願いたします。